

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数に制限がある場合は、句読点や記号も字数に含まれるものとします。

音和の父は事業に失敗し、離婚。今は音和と二人、野川近くの小さなアパートで暮らしている。音和は転校先の中学で変わり者の教師河井に出会うなど新しい世界を広げているが、高度な映像技術を持っている父は、兄のフォトスタジオに雇われ、街路でチラシ配りなどをしている。その事実には音和は衝撃を受けていた。

父がでかけてしばらくのち、湿った風が吹きはじめた。音和は窓をしめながら、学校のある台地の上空に、重々しく雲がたれこめているのを目にした。厚い雲のなが（A）閃くのは、そこに雷雲があるからだった。

部屋のなかには、まだ手さげ袋がひとつのこっていた。印刷所から配達されたままのクラフト紙につつまれた束がはいっている。音和はそのなかからひと束をとりだしてほどこき、父がしていたように、投げこみのサイズに折りたたんだ。やはり、以前に目にしたものとはちがう仕様だ。

記念写真の特製のフレーム仕上げるサービスつき、と書いてある。赤ん坊の写真ならばスワンやカナリアなどの鳥とリボンをあしらったもの、七五三の写真には、金や銀の縁かざりのついた胡蝶やクジャクのもようがつく。古風にかたよらず子どもじみでもない絵柄が選ばれ、それなりに洗練されているのは、音和にとつて意外だった。

彼もまた、伯父の商売の俗っぽさを、ひそかに批判していたのだが、本館のほかにスタジオを新しくかまえるほど繁盛しているということは、それなりに人の心をつかんでいるのだ。おかげで父も、失業を免れた。

近隣の家で雨戸をたてる音がひびく。雨がふりだしたのだ。（B）、激しい雨音に変わった。音和は父の自転車もどつてこないかと耳をそばだてたが、雨音にかき消されてなにも聞こえない。

三百メートルほどのさきの神社の参道入り口に、自動販売機といっしょに公衆電話がある。音和はそれを思いだした。午後

九時半をまわったばかりだったが、隣接する大家の家はすでにひっそりとして、電話をかしてほしいと云うのは気がひけた。音和は公衆電話を目ざして、雨のなかを走りだした。急ぐために、傘はささず手にしたまま走った。

家をでたときは、河井に電話をかけるつもりでいた。だが、泣きごとを云うために番号を聞きだしたのではない。背なかを雨にうたれるうち、音和はなにかもつと強い自分でありたいと思いはじめた。強情で生意気な点では自覚のある音和だったが、それはたとえば厚く積もった堆積物のようなもので、いくらでも流動する。それらがぜんぶとりのぞかれたときに、のこるものが強くなければ意味がない。

夜だろうと雨だろうと、飲まず食わずで巣を目ざすという鳩のことが思いだされた。休めば危険がまず彼らにとって、翔びつづけることが身を守るもっとも有効な手段でもあるのだ。感情的なふるまいなど、はいりこむ余地がないほどきびしい現実に立ちむかっている。

音和は、やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした。神社の参道前へさしかかったとき、前方に自転車のライトが見えた。街灯がそのあたりを照らしている。だから、たがいに相手がだれかをみとめた。

「……どこへいく？」

雨にぬれた父の姿は、音和に梅雨の晩のことを思いださせた。ただ、今の父には崖つぶちを歩いているような気配はなかった。ひらきなおったようすで、なかば平然と雨にぬれそぼっている。

「伯父さんに電話しようと思って、」

音和は気負いながらそう云った。河井に泣きごとを云わないときめたあとで、彼が決心したのは、伯父に直接抗議することだった。

「なんの用で？」

「だって、こんなのはフェアじゃない。おとうさんは、もつとまともな仕事ができるのに、それをさせないのはまちがっている。駅まえでのチラシ配りや、郵便受けへの投げこみなら、ぼくにもできる。……だから、ぼくがやると云おうとしたんだ。おとうさんには、ちゃんとした仕事をさせてほしい。」

伯父に電話をしようと決意したときの音和は、父への不当なあつかいに抗議することしか考えていなかった。自分にも何かができるとは、思っていなかった。雨にぬれながらも、音和をまつすぐに見つめる父の姿が、彼にそれを云わせたのだ。

父は笑みを浮かべた。それを見て、音和の緊張がゆるんだ。こらえていた思いが涙になる。(C)傘を持つ手をおろしていた音和は、ふたたび雨にぬれていた。雨脚がはげしくなる。だが、その雨はここちよかつた。

音和の手から傘をとった父は、それを息子にさしかけた。自転車の前かこの手さげ袋は、すっかり雨にぬれている。簡単な防水加工をしてあるが、雨はそれ以上にふつていた。

「それ、ぬらしたらまずいんじゃない？」

音和は手のひらでほほを拭いながら父にたずねた。

「たぶん、」

父は笑顔でこたえ、帰ろう、と音和をうながした。ふたりは雨のなかをアパートへもどり、ゆずりあったあげく音和が先に二度目のシャワーをあびに浴室へはいった。彼につづいて父がはいり、(D)遅い食卓についた。まだ十一時にはならない。だが、この時間、大家宅は寝静まって、気配もなかった。雨音が弱まると、とたんに虫の鳴く声があった。

音和は、先ほど折りかけていたチラシを放りだしたままなのに気づき、あわてて片づけた。こっそり手つだおうとしていたのに、きまりが悪かつた。

「心配をかけて、すまなかつた。でも、私は平気だから。おまえもよけいなことで気をもまなくていい。自分のことに集中してろ。これでも、おまえが思っているよりはずっとタフなんだよ。とくに、伯父さんにたいしては。」

いつもの父の意地がでる。

「そういう態度だから反感を買うんじゃないの？」

「おとなしく頭をさげれば、よけいにたたかれるだけさ。……子どものころから、そういう兄だつた。」

「憎しみあつてゐるの？」

父は小さく笑い声をたてた。

「ただの兄弟ゲンカだよ。いまは借金があるから、ほんとうのケンカはそれを返してからだ。そう思って辛抱してる。それに、いつまでも兄の世話にはならないさ。」

音和はようやく、自分が考えるほど父はこのチラシ配りを深刻に受けとめていないのだと安堵した。

「可愛げのない弟だね。」

「おたがいさまだ。六歳ちがいの弟に、バスでも新幹線でも飛行機でも、窓側の席を一度もゆずつたことのない兄だよ。」

われわれの亡き父親は、……音和が好きだったおじいちゃん、兄にも私にも小学生のときからひとつづつカメラを持たせてくれた。だが、旅行先からもどつてフィルムを現像にだすと、私のはきまつて感光していて、プリントができないんだ。寝ているあいだに、兄がカメラの裏布タをあけるんだよ。証拠はなかつたが、ほかに理由は考えられない。そういう兄と、どうして仲良くなれると思う？」

「それゆがんだ愛情表現なのかも。」

「わかつたふうな口をきくなよ。その手の知らなくてもいい俗な云い草を、いったいどこから仕入れてくるんだ？」

おとうさんの書棚にあつたミステリー、とは答えず、音和はべつのことを口にした。

「ぼくにもきょうだいがいれば、おとうさんの気持ちも、もうすこしわかつたと思うけど。」

「……もし弟か妹がいて、彼か彼女がおかさんと暮らしたいと云つたら、おまえも向こうへいったんだらうな。」

「そのほうがよかつた？」

「私が訊いているんだよ。父親の仕事が自分の生活圏でのチラシ配りだなんて、がっかりだろう？」

「……ぼくは、」

この父を好きだと、いまなら迷いなく答えられる。自分たちの都合だけで離婚話を持ちだした両親に腹をたて、意地をはって、好きでもない父といっしょに暮らすのだと思ひもしたし、態度にもあらわした音和だつたが、かつての¹²ぜいたくさのかけらもないいまの暮らしが、さほど苦にならないのは、身近になつた父が、ありのままの姿を示してくれるから

だった。

「……いまのおとうさんのほうが……好きだから。かつこうつけているときより、ずっといいよ。」

父は箸^{はし}をおき、ありがとう、と頭をさげた。そのとたん、音和の目に涙があふれた。父はタオルをさしだした。

「チラシ配りは、私が志願してはじめてことなんだよ。サービスでつけているフレームのデザインを変えたほうがいいと提案したら、伯父さんはサービスなんだからデザインに凝^こる必要はないと云いつつも、企画は承認してくれた。そのかわり、効果があがったとはつきり数字に出ないときは、新しいフレームとチラシの製作費を給料からさしひくと云われた。」

¹³「筋は通ってるね、」

父は軽快な笑い声をたてた。「なまいき云ってないで、もう寝ろ。」

音和はたたみの部屋に布団^{ふとん}を敷いた。昼のあいだに祖母がきて、日にあてておいてくれた布団は、まだ温かさがのこっていた。音和はほほをあてながら、声はずませて父をよんだ。

「おとうさん、この布団、ひなたの匂^{にお}いがするんだよ。」

「……それが、うれしいのか？」

「うん、うれしい。すごく気持ちがいい。」

「もっとはやく知れたかったよ。おまえをよろこばせるのが、そんなに安あがりなことだったとはね。」¹⁴

「ぼくも、ひなたの匂^{にお}いがあるにいいものだなんて思わなかった。」

音和は、しばらく布団にうつぶせていた。彼が味わっていたのは、ひなたの匂^{にお}いばかりではなかった。意識のなかですぶっていた父への不満やわだかまりが融^とけてゆく、そのこちよさをいっしょに味わった。

《長野 まゆみ『野川』より》

(注)

感光……写真フィルムが光を受けて反応し、化学変化を起こすこと。

問 一 () AとDに入る語としてふさわしいものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使わないこと。

ア、ようやく

イ、まもなく

ウ、いつのまにか

エ、ときおり

問 二 主人公の音和とその父との共通した性格を、文中の言葉を使って、五字で答えなさい。

問 三 — 2 「ひそかに」・6 「みとめ」について、傍線部と異なる意味で漢字が使われている熟語を、次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

2 ア、密輸

イ、秘密

ウ、密使

エ、密度

6

ア、認定

イ、確認

ウ、認識

エ、誤認

問 四 — 1 「伯父の商売の俗っぽさ」とありますが、客に対する伯父の俗っぽさは、具体的にどのようなところに現れていますか。文中の言葉を使って、三〇字以内で答えなさい。

問 五 — 3 「人の心をつかんでいる」と、このとき音和が感じた理由を、四〇字以内で答えなさい。

問 六 — 4 「もっと強い自分」とは、どのような自分ですか。文中の言葉を使って、一五字以内で答えなさい。

問 七 — 5 「やみくもに走るのをやめ、傘をさして歩きだした」とありますが、それはなぜですか。その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、鳩のことを思い出して、感情的にふるまうことをやめたから。

イ、雨があまりにはげしく降っているために、無理をするのをやめたから。

ウ、前方に父の自転車を発見したことによって、あえて急がなくてもよくなったから。

エ、鳩のように休まず翔びつづけることで身を守るためには、ペースを保つ必要があるから。

問 八 — 7 「崖っぷちを歩いているような気配」とありますが、これは「梅雨の晩」の父のどのような様子を表現しようとしていますか。その説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、事業の失敗、離婚と、次々と身の上におこる不幸を悲観し、実際、崖から身を投げようと考えた父の失意を、父の涙を梅雨に見立てることで表現している。

イ、失業、離婚と重なったが、自分が体を張って音和だけは守り抜くという父の強い決意を、雨がふる崖っぷちという厳しい自然の中に立つという形で表現している。

ウ、事業に失敗、失業した苦しみから、生きるか死ぬかの境界をあてもなくさまよう父の心の危うさを、雨の中、崖っぷちを歩いているという姿で表現している。

エ、失業、離婚と思い通りにならない中で、なんとか音和の父親としての資格だけは取り戻したいという切実な思いを、雨の中の崖っぷちに在るという状況で表現している。

問 九 — 8 「ここちよかった」とありますが、このときの音和の気持ちの説明としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、父にしかられずにすんだ安心感と、父親を初めて身近に感じる事ができた喜び。

イ、自身が成長したことを実感した満足感と、自分の出過ぎた発言を許してくれた父への感謝。

ウ、自分と父が同じ気持ちであったという一体感と、自分の発言によって父との関係を修復できた幸せ。

エ、心の中に蓄積していた思いを父に話せた解放感と、父がそれを受け止めてくれたことへのうれしさ。

問一〇——9「こつそり手つだおうとしていた」とありますが、その理由としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、父に対して、まだ感情の中でわだかまりがあり、表立って手伝うことに抵抗を感じていたから。
イ、子どもが直接仕事を手伝うことは、父に情けない思いをさせ、プライドを傷つけると考えたから。
ウ、父への不当なあつかいは自分も知っているということを暗に伝え、父と痛みを共有したかったから。
エ、直接は言えない父への感謝を伝え、父についてきて後悔はなかったという思いを表したかったから。

問一一——10の「深刻に」とは、「チラシ配り」の仕事をどのように受けとめることですか。説明しなさい。

問一二——11「それもゆがんだ愛情表現なのかも」とありますが、ここに表れている音和の性格を、文中から一語で抜き出しなさい。

問一三——12「ぜいたくさのかけらもないいまの暮らし」とありますが、それがもつともよくわかる具体例を、本文全体を読んで答えなさい。

問一四——13「筋は通ってるね」とありますが、どのような点で筋が通ると考えたのですか。ふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、よい意見は取り入れつつも、フェアではない労働条件は改めない点。
イ、あくまでも利益を追求することを望み、その効率を第一に考える点。
ウ、父に対する応対の仕方を、子供の頃からずっと一貫して変えない点。
エ、表には出さないが常に父のことを心配し、それとなく手助けする点。

問一五——14「おまえをよろこばせるのが、そんなに安あがりなことだったとはね」とありますが、父が気づいていないもう一つの「安あがりなこと」を、文中の言葉を使って答えなさい。

問一六 文中の3カ所の〰〰〰線部「重々しく雲がたれこめている」「雨脚がはげしくなる」「ひなたの匂い」というような自然に関する描写は、音和の心情の変化を効果的に表していると考えられますが、その変化はどのようなものですか。その説明として適当な部分を、「変化」という言葉に続く形で、三〇字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

次の問いに答えなさい。

問 一 次の1～3の四字熟語の()にはそれぞれ共通する漢字一字が入ります。その漢字を記しなさい。

1	() 義名分	油断 () 敵	氣宇壯 ()
2	() 衣無縫 むほう	奇想 () 外	不俱戴 () ふぐたい
3	() 耳東風	牛飲 () 食	南船北 ()

問 二 「百聞は一見にしかず」の意味としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、何度も繰り返し聞いておけば、自分の目で実際に見る必要などないということ。
 イ、何度も繰り返し人から聞くよりは、自分の目で実際に見たほうが確実だということ。
 ウ、何度も繰り返し人から聞いた上で、自分の目で実際に見て確かめるのが最善であるということ。
 エ、何度も繰り返し人から聞けば、自分の目で実際に見たのと同じような知識が得られるということ。

問 三 次の1～5の言葉の対義語をそれぞれ答えなさい。

- 1、肯定 2、支出 3、集合 4、主観 5、権利

問 四 次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1、安全が確認されたので、工事をサイカイします。
 2、同じ兄弟でもタイショウ的な性格です。
 3、包丁をトいで、切れ味を確かめる。
 4、この問題は難しすぎて、全くケントウがつかない。
 5、転職して新たな仕事にツク。

問 五 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1、拾得物を交番に届ける。
 2、静脈に注射をする。
 3、天気の良い日は戸外で遊びましょう。
 4、子どもたちの健やかな成長を望みます。
 5、知人が著した小説はベストセラーになった。

A
B
C
D

問



問

2
6

[illegible][illegible]

問 六

問 七 問 八 問 九 問 一〇

問

問

問

問一四

問
一
五

問 一 六

始め
終わり

変化

[illegible]

1	
2	
3	

問

二

--

問	1	
三	2	
	3	
	4	
	5	

問	四
1	
2	
3	
い で	4
5	
く	

問	五
1	
2	
3	
4	
5	やかな
	した

